

英語動詞 *pick* に見る多義性の 拡張メカニズムと言語教育 — 認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して —

森 山 智 浩

1. はじめに

認知言語学は人間の経験主義的立場を重視し、身体性・顕著性・注意志向といった脳や心の働きの結果事象として言語現象を捉えるスタンスをとる。そして、我々の生身の肉体を通して、または自身が属する文化・社会的環境との相互作用を通して得られる「経験」という根源領域を基盤に、人間が認知的無意識の中で物理的外界や抽象世界を如何に認識し、ひいてはその多様な経験を如何に目標領域へ反映させているかを明らかにする学問である。このように、メタファーとカテゴリー化の二つの理論を主幹とする認知言語学の根本は、人間を人間たらしめる経験主義に根ざした「大脳活動内における概念メカニズム」の正体を、その結果事象である言語表現という側面から解明することにある。

しかしながら、語の多義性を明らかにする上で、ここで注意すべきことは「語の意味変化は論理的な連続体である」ということである。言葉は人間の文化／文明の発展・変化と共に発達してきたことから、そこに光を当てることは人間が如何にして外界と関り合ってきたのか、という思考の進化の過程を明らかにすることに他ならない (cf. Lakoff and Johnson (1980: 117-118))。換言すれば、思考の進化の過程は、極めて物理的な物体や事象から抽出されるプリミティブな認識を多様なものに適用してきた人間の脳内活動の歴史でもある。したがって、その連続体を構成する各々の意味は、各々の意味変化が生じた時代に生きた人々の認識の表れであるから、「史的」は「認知」に内包され得る。

一方、我が国の外国語語彙学習指導に目を転ずれば、日本語訳の機械的な丸暗記に過度に重点が置かれている感は否めない。多少過激であるかも知れないが、例えば従来の日本史や世界史の授業では、歴史的事実とその年号ばかりの丸暗記を強要してきた。数学、物理、化学、生物などにおける公式や法則、部位の名称等の丸暗記もその類に属することであろう。これらの丸暗記は必要不可欠ではあるが、ほとんどそればかりの教授法が単調な授業を招き、学習者の好奇心を失わせ、科目離れを誘導してきたことは否定できない。このような現状下、種々の単一語及び連語表現の意味のからくりを上如上の概念的見地から解明し、実際に教壇でタクトを揮う者がそれらを背景知識として持つことは、特に「英語表現＝日本語訳」式の機械的な丸暗記が苦手な学習者に対して自身の自然な経験の諸相に則した「理解」範疇下の語彙学習指導を可能にするばかりか、英語そのものへの興味づけをも行ない得るのではないかと考えられる。

以上の理由から、本論では以下の二点（＝（１）－（２））の研究基盤を「メタ・プロセス理論」（＝（３））と総称して論を進める。

（１）（従来の）認知言語学的観点の導入：

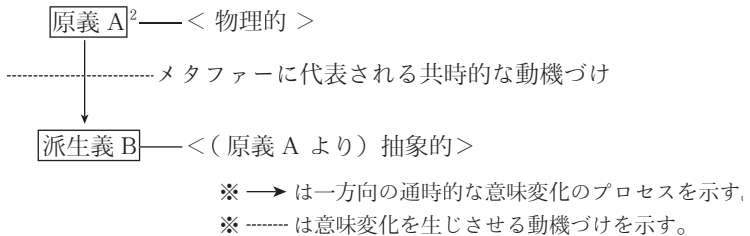
教育現場に有効と思われる（Lakoff, Fauconnier 等を主とする）認知言語学の諸原理を導入・活用する。特に、語の意味変化のプロセスが生じる背景にはメタフォリカルなフィルターを通したトリガー（動機づけ）が存在していると考えられる。

（２）史的観点の導入：

意味変化のプロセスには原義から種々の派生義に至る通時的な一方向の流れが存在する¹。「共時」の積み重なりが「通時」であることは言を俟たない。本来一つの単語には一つの「（派生的意味を生む際に中心的となる）意味」しかなく、それが時の流れと共に複数個の意味を生む役割を果たしていることは言葉の歴史が証明している。しかも、

自然の森や山に囲まれた昔の人々の生活環境を想像すれば、その中心的な意味とは目に[・]見[・]え[・]る[・]よ[・]う[・]な[・]素[・]朴[・]な[・]具[・]象[・]物[・]²を指し示す意味であって、目で見ることでも手で触ることもできない抽象物を指し示す意味は後々に生まれたと言える。

(3) 上記(1) - (2)の観点を融合させたメタ・プロセス理論に基づく意味変化の捉え方：



その目的は偏に、我が国における英語学習者の語彙学習上、特に苦手とされる「単一語の多義性」及び「(不変化詞との結合による) 連語表現の意味」が生じめるメカニズムの一端を論理的かつ経済的な見解でもって明示し、自発的で応用力のある語学力を育成し得る「語学教員のさらなる資質の向上」³に貢献できるような背景知識の一端を論じることにある。

そこで、以下ではまず、イディオムと称されることが多い‘burn both ends of the candle’を例に挙げ、「史的」は「認知」に内包され得るという理念の下、その意味のからくりをメタ・プロセス理論の観点から明らかにする。その後、典型的な多義語の一つである‘pick’を取り上げ、そのプロトタイプ効果が生じる概念拡張メカニズムをメタ・プロセス理論の観点から明らかにする。

1. 共時と通時を通した意味変化の空間的捉え方

—メタ・プロセスを通して—

AEGUでは、‘idiom’が以下（1）のように定義されている。

- (1) An *idiom* is a group of two or more words which we have to treat as a unit in learning a language. We cannot arrive at the meaning of the *idiom* just by adding together the meanings of the words inside it.

— AEGU (s.v. idiom) (下線筆者)

上記（1）の引用下線部に示されているように、イディオムにおける各構成語の意を互いに付加するだけでは一見、その全体の意と直接的に結びつかないように感じられる場合がある。「熟語表現」という名に変えて現在の日本の英語教育に脈々と受け継がれている、こうした捉え方に基づけば、以下（2）—（3）に見られる‘burn both ends of the candle’の意も、各構成語の意を総和しただけでは字義通りの意と如何なる結びつきが存在しているのか、一見しただけでは想起し難い。

- (2) Both the [a, one’s] candle at both ends burn = burn both ends of the candle 《略式》

朝早くから夜遅くまで働く、精力を使い果たす、無理をする。

— GEJD (s.v. candle 成句)

- (3) to become very tired by trying to do too many things and going to bed late and getting up early

— OALD (s.v. burn the candle at both ends)

しかしながら、イディオム／熟語の意は語と語との論理的結合によって生

じ、その結合には広い意味での意味論が関っていることから、あらゆる言語において語と語が結合する場合でたらしめに行なわれてもよいという原則はない (cf. 上野 (1999: 1-2))。このような観点に基づき、「意味変化を平面的ではなく立体的なプロセスで捉える通時的観点」と「その各変化を引き起こすトリガーを認知的に捉える共時的観点」とを融合させたメタ・プロセス理論を活用すれば、上記 (2) - (3) に見られる表現の意味のからくりも明示することが可能となる。

まず、burn the candle at both ends の字義通りの意は「蝋燭の両端に火をつけて燃やす」であることは言うまでもない。そして、*Promus of Formularies and Elegancies* (1592) において Francis Bacon は次の (4) のような形で同表現の概念を他事象に転用させている。

(4) To waste that realm as a candle which is lighted at both ends.

— Bacon (1592)

つまり、ここでいう概念とは「みだりに使ってしまう」認識であり、蝋燭を両端から燃やしてしまうような「無闇な消費」概念がここに転移／反映されていることが確認される。さらに、次の (5) - (6) に見られる LIFE IS A FLAME という概念メタファーをトリガーとしてこの「無闇な消費」概念が「命」という抽象物に転移された初出事象が以下 (7) である。

(5) …つづいて三番目の四行連 [In me thou seest the glowing of such fire, That on the ashes of his youth doth lie, As the deathbed whereon it must expire, Consumed with that which it was nourished by. (君は炎のまたたきを私の中に見るだろう、若き日の灰の上に残った明かりを、それは炎が消滅する死の床であり、かつて養ったものと共に消えゆくのだ。)] は、基本的な隠喩の組合せによっ

て生命が炎と結び付けられている。…三番目の四行連は一生を炎の消長になぞらえる。人生=炎という隠喩は英詩の伝統では広く見られるものである。

—大堀（訳）（1994: 38）（一部省略筆者）（〔 〕内表記は Shakespeare, *Sonet 73* 番より、その日本語訳は大堀訳（1994: 35）より抜粋）

(6) 生命は炎である：火はゆっくりと発火し、それから炎が立ちのぼり、そのまま燃え続け、やがて灰の中でくすぶってから消える。

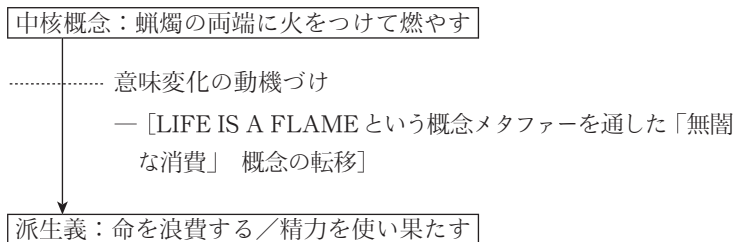
—大堀（訳）（1994: 99）（下線筆者）

(7) By sitting up till two in the morning, and rising again at six…
Frank Headley *burnt the candle of life at both ends*.

— Charles Kingsley (1857), *Two Years Ago* (イタリック筆者)

以上の理由から、burn the candle at both ends の意味変化は下記（8）のメタ・プロセスで簡潔に明示することが可能となる。

(8) burn the candle at both ends における意味変化のメタ・プロセス



このように、共時的な見地に基づいた平面的な拡張モデルだけでなく、「立体的なプロセスで捉える通時的観点」も交えることによって初めて、その表現の意味変化の真の姿が明確になる場合も存在する。ここにメタ・プロセスの真価が発揮されることになるのである。

2. ‘Pick’ の多義性を生じさせるメタ・プロセス

2. 1. ‘Pick’ に関する従来の教示内容とその問題点

まず、以下(1) - (2)に注目する。

- (1) **pick up** ~ [**pick ~ up**] ~を拾い上げる、(人を車に)途中で乗せて行く

Tom **picked me up** on his way home.

— 『[進級式] 中学英単語帳』⁴

- (2) pick up ~を拾う；~を乗せる

Please **pick up** the pen from the floor.

— 『英熟語ターゲット 1000』

筆者が知る限り、我が国でよく用いられ、かつ「熟語」を取り扱った語彙学習の出版書の多くで pick の項を調べると、pick と up とを結合させた連語表現がよく掲載されている。他方、pick という単一語に目を転ずれば、次の(3) - (4)のような記載内容を多々見かけることがある⁵。

- (3) **pick** 動 ①(花・果実などを)つむ、つみとる ②選ぶ

When spring comes, we go out to pick flowers.

— 『[進級式] 中学英単語帳』

- (4) **pick** 動 ①をつみ取る ②を選ぶ ③をつつく

I'll **pick** some strawberries for you.

— 『データベース 3000 基本英単語・熟語』

ここで学習者は、「pick と up との結合体でなぜ「(人を車に)途中で乗せて行く／~を乗せる」という意が示されるのか？」という疑問が生じ得る。

さらに、下記（５）のような辞書記載に目を向けると、pick up の多義性に困惑し、それぞれの意がまるで無機質に生じているかの如く錯覚を覚えてしまった学習者は各意を機械的に丸暗記しようとする不経済な活動に終始しかねない。

- （５） 1. to take hold of and lift up
2. to gather together; collect: *picked up all the pieces / (fig.)
After our political defeat, we must pick up the pieces and start again*
3. to improve: *Trade is picking up again*
4. to improve in health
5. to gain; get: *where did you pick up that book / your excellent
English / the habit / such ideas?*
6. to cause to increase: *to pick up speed*
7. to (cause to) start again: *to pick up where we left off / to pick
up the conversation after an interruption*
8. to collect (something); arrange to go and get (someone):
Pick me up at the hotel
9. to give (someone) a ride in a vehicle

— LDCE (s.v. pick up v. adv. 1–9)

（辞書は各表現の意や語法を調べるためのものであるが）こうした不経済性は、たとえ「打倒！丸暗記」というコンセプトを旗頭にした以下（６）のような語彙学習書を用いても、その多義性のメカニズムに何ら言及されることはなく、依然として解決され得ない。

(6) **pick A up**

- ①Aを（迎えに行って）車に乗せる
- ②A（言葉・習慣など）を（自然に）身につける・聞き覚える
- ③Aを（店で）買う ★「～を選ぶ」の意味はない。

Can I pick you up at your house at about ten?

Children can pick up a foreign language quicker than adults.

— 『システム英熟語』

Pick up の多義性もさることながら、「★「～を選ぶ」の意味はない」とする記述を見た学習者にとっては、pick と pick up との概念的相異は何か、さらには後者が上出（5）のような多義性を示す要因となった up の存在意義は何か、という新たな混迷を極めるに違いない。特に、次の（7）に示される pick と up（さらには on）との結合体に至っては、

(7) I want to *pick up on* what you said earlier.

— *GEJD* (s.v. pick up 4)

上出（5）の7で見られた 'to (cause to) start again'（もう一度始める（ことを引き起こす））という意が如何にして発生しているのか、また、その背景に人間の如何なる認識が存在しているのか、というメカニズムを自身の日常経験の自然な相に沿って学習できる機会は、（筆者が知る限り）これまでの語彙参考書に基づいた学習指導では存在し得なかった。

そこで、以下では、

(8) まず、上記（7）で pick を用いた連語表現の意味のからくりを明らかにする前提として、視覚経験の観点から「上（方）」の空間方向性と「目立ち」概念との結びつきを観察する（2.2.）。

(9) そして、(8) から導き出された視覚経験の自然な相も交えながら、pick と up とが有機的に整合することによって多義を生じさせるメカニズムを明らかにする (2.3.)

(10) その後、(8) から導き出された視覚経験の自然な相を活用すれば、前出(2), (4), (6) では別々の頁に記載されていたその他の連語表現も同一の観点から体系化して学習指導できることを明示する (2.4.)。

2.2. 視覚認識と「目立ち」概念 一方向づけのメタファーを通して一

日本語で「人目をひく」事象を表す典型的な表現の一つが「目立つ」であるが、これは「目の前に立つ」、すなわち「眼前に存在するようになる」という [+発生] の概念で捉えられる。この「発生」概念は「風立ちぬ」「揚げ立て」などにも引き継がれているが、英語でも同様の概念が存在している。その事例の一つが以下(1)である⁶。

(1) Erin: Why are they here? I went to pick them up. George: She came by and said something came *up* and had to drop the kids off.

— 映画 *Erin Brockovich* の一場面から (イタリック筆者)

ここで、認知言語学における根本的な研究スタンスの一つとして次の(2)を鑑みれば、[+発生] の概念が「上(方)」の空間方向性で表される根源領域のスキーマは何か、ということになる。

(2) 時の経過と共に各単語に次々と新しい意味が生まれてきた歴史的事実を鑑みれば、本来一つの単語には一つの「(別の意味を生む際に中心的となる) 意味」しかなく、それが時の流れと共に複数個の意味を

生む役割を果たしたと考えられる。しかも、自然の森や山に囲まれた昔の人々の生活環境を想像すれば、その中心的な意味とは目に[・]見[・]え[・]る[・]よ[・]う[・]な[・]素[・]朴[・]な[・]具[・]象[・]物[・]²を指し示す意味であって、目で見ることでも手で触ることもできない抽象物を指し示す意味は後々に生まれたと言える。

このような捉え方の下、近年、認知言語学の分野では、一方向仮説に基づいた意味変化の流れを明らかにしようとする動きも盛んに見られる。その一例が下記(3)であり、ここでは「上(方)」と対極をなす「下(方)」の空間方向性の多義性に言及されている。

(3) Go down this street one block and turn to the right.

この道を通って最初の角を右に回りなさい。

この down の使い方は、話し手の感覚によるもので、高所から低所への移動が必ずしも含まれるわけではない。

— 田中他 (2007: 103) (下線筆者)

この down について、一般には「方角・方向」という意味用法に分類され、「話し手から離れて」として解釈される場合が多い (cf. *GEJD* (s.v. *down adv.* 5))。そして、上記(3)では、この down の使用理由を「話し手の感覚によるもの」として位置づけている。とするならば、次の(4)において「(話し手・問題の場所の) 方へ」と解釈される up の使用理由も同様に、「話し手の感覚によるもの」として位置づけられることになるのであろうが、学習者の立場に立てばいづれにしてもその「話し手の感覚」とは一体如何なるものか、という疑問は依然として残されたままになるに違いない。

(4) [接近] (話し手・問題の場所の) 方へ、(…に) 向かって (to)

She came *up to* me and shook hands.(彼女は私の所へ来て握手した)

— *GEJD* (s.v. *up adj.* 7)

重要なことなので再度述べるが、認知言語学は人間の経験主義的立場を重視し、身体性・顕著性・注意志向といった脳や心の働きの結果事象として言語現象を捉えるスタンスをとる。そして、我々の生身の肉体を通して、または自身が属する文化・社会的環境との相互作用を通して得られる「経験」という根源領域を基盤に、人間が認知的無意識の中で物理的外界や抽象世界を如何に認識し、ひいてはその多様な経験を如何に目標領域へ反映させているかを明らかにする学問である。したがって、如何なる言語表現であってもそこには何らかの「話し手の感覚・認識」が反映されているのだから、「その感覚・認識とは何か？」が概念的立場から問われるべきであろう。このような問題を解決すべく、「上(方)」概念と派生義とを結びつける意味変化のメカニズムを学習者の自然な経験の相に沿った形で語彙学習指導に還元し得る捉え方が以下(5)である。

(5) 或る物体、もしくはその一部を大写して写真に撮る時、日本語では(3)

(3) 私は子犬をアップで撮った。

のように言うことがある。この「アップ (< up)」によく似た概念化は英語にも存在する。

(4) I took a close-*up* photo of a puppy.

これら(3),(4)に共通する概念は、写真を撮る主体者の目(と、カメラのレンズ)が対象物に近づくにつれて、その対象物の姿がどんどん大きく見えるようになる、ということである。これを一つの仮説として(5)として表示する。

(5) up: 観察の主体者が対象物に接近するにつれて、その対象物の姿が主体者の目に次第に大きく映ることを表す。

「対象物への接近＝対象物が視覚的に拡大」という現象は、観察する主体者自身（従って、目）の移動を基盤に置いているが、逆に観察する主体者（の目）が移動しなくとも対象物が移動してくれば結果は同じである。

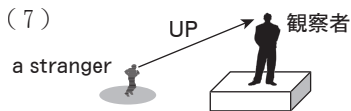
— 上野・森山他（2006: 298）

上記（5）から、ここでの up には「観察の主体者が静止していても対象物が接近するにつれて、その対象物の姿が主体者の目に次第に大きく映る」という認識が反映されていることが導き出される。たとえば、次の（6）

（6） A stranger came up to me.

— 上野・森山他（2006: 297）

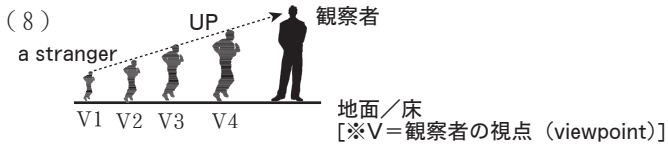
が表す事象について、まず考えられる前提状況の一つに、下図（7）に描かれるような「a stranger」の指示物が観察者よりも物理的下方に位置する」場合が挙げられる。



— 上野・森山他（2006: 297）

しかしながら、この（6）の命題が成立するには両者の存在位置に物理的高さの差が必ずしも要求されるわけではなく、「a stranger」の指示物が低所から高所へ移動しなければならない」ということが必要条件ではない。結果から言えば、（6）が表す事象の前提状況として「a stranger」の指示物と観察者とが同じ高さに位置するにも拘らず、「上（方）」の空間方向性概念表示語

up が用いられる背景には、上出（5）で見られた「接近＝拡大」という概念的等式が存在している。つまり、次の（8）

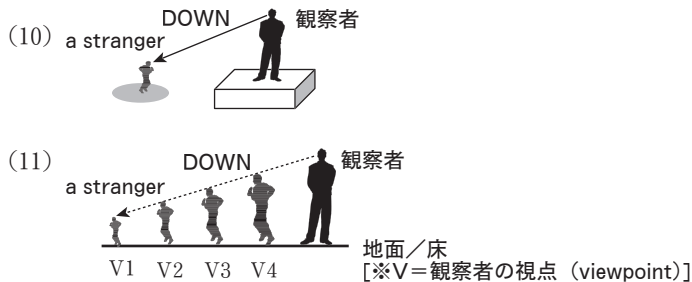


— 上野・森山他 (2006: 297)

に描かれるように、ここでの up は「観察の主体者が静止していても対象物が接近するにつれて、その対象物の姿が主体者の目に次第に大きく映る」という「拡大」概念を表示しており、観察者にとって接近物が「上方に延びていく」ように捉えられる日常の知覚経験が UP としてその姿を現しているのである。だからこそ、上出（6）と対をなす次の（9）

(9) The stranger went *down* from me.

が表す事象に down が用いられる背景には、下図（10）－（11）



のいずれかの捉え方が存在していることが必要十分条件であり、特に後者では「下（方）」の空間方向性をもって「静止している観察者から対象物が離れるにつれて、その対象物の姿が主体者の目に次第に小さく映る」という

「縮小」知覚経験が表されているのである。ここでようやく、上出（2）（以下（12）として加筆再掲）の実例における down の使用理由が明らかとなる。

(12) Go down this street one block and turn to the right.

この道を通って最初の角を右に回りなさい。

この down の使い方は、話し手の感覚によるもので、高所から低所への〔物理的〕移動が必ずしも含まれるわけではない。

— 田中他（2007: 103）（下線・[] 内表記筆者）

つまり、「高所から低所への物理的移動が含まれない」場合にこの文が成立する前提には、以下（13）のスキーマが存在しており、直示的中心から離れる移動対象物の姿が「縮小」していくように捉えられる観察者の知覚認識が DOWN 概念としてその姿を現しているのである。

(13) SOURCE：直示的中心 GOAL：非直示的中心 TEHME：聞き手

以上、前出（8）の「視覚による拡大＝上（方）（UP）」概念では、観察者の視点とその視界内で捉えられる対象物の二者に焦点が当てられていた。それに対し、二者間に挟まれた「空間」に焦点が当てられる図地分化（figure / ground segregation）の反転が生じた場合、その概念は「空間の閉鎖＝上（方）（UP）」概念に遷移することになる。次の（14）を見てみよう。

(14) All the doors and windows were closed / shut *up*.

Close / shut 等はいわゆる閉鎖動詞と呼ばれる。そして、閉鎖動詞と共起す

る *up* は通例 *completely* と言い換えられ（例えば *LDCE* (s.v. *up*))、閉鎖行為の完了を表す用法と解釈されることが多いが、その出所は単に閉鎖行為が完了したからではない。なぜなら、前出（8）図を基に二者間に挟まれた「空間」に焦点を当てた場合、二者間の距離が近づくにつれてその空間は「上方」に消滅する概念で捉えられるからである。このことは次の（15）が表す事象が

(15) Please *squeeze up* a little closer together.

下図（16）として描かれ得ることを考えれば理解しやすい。



Squeeze は物体と物体とが互いに距離を詰めることによってその間に存在する空間を押し狭める行為を指す。空間は目に見えず、手で触れない物なので物体間の空間を物理的なもの、例えば空気の入った風船に置き換えた状況を考えてみれば、完全に二者間の距離が詰まり、その挟まれた空間が圧迫された結果、「上方」に拡大して最終的には「消滅」してしまう⁷。こうした図地分化の反転によって、「上方」概念表示語 *up* は、次の（17）のメタ・プロセスに示されるような概念遷移を起こしたと考えられる⁸。

(17) **up** の中核概念：上方への移動（及び上方移動到達後の位置）⁹

----- 意味変化の動機づけ—観察者の視覚認識

派生義：（観察者の視覚による被認識物の）拡大

----- 意味変化の動機づけ

- 図地分化：「観察者とその被認識物」と「その二者間に挟まれた空間」が図地反転を起こし、前者が背景（ground）、後者が前景（figure）として分化
- 完全に二者間の距離が詰まり、その挟まれた空間が圧迫された結果、「上方」に拡大して最終的には「消滅」する、という認識

派生義：二者間に挟まれた空間の消滅；閉鎖の完了¹⁰

2. 3. メタ・プロセスに見る「目立ち」概念の有機的整合性

2. 2. では、我々の日常生活を通して得られる視覚経験を基盤に、「目立ち」事象が生み出される [+発生] 概念と「上方」の空間方向性が結びつくメカニズムを観察した。こうした経験的見解（cf. Ungerer, F. and H. J. Schmid (1996) 'experiential view'）が異言語間にまたがって存在する根源的理由は偏に、人間という同じ生物が共通の知覚器官を用いて獲得した「上-下」のプリミティブ・イメージ・スキーマ（cf. Lakoff and Johnson (1999)）を外界の事物に投射する同一の経験のゲシュタルトを大脳内に保有しているからに他ならない。このような空間関係づけ（spatial relations）（cf. Lakoff and Johnson (1999)）の認識を導入／活用すれば、本節 2. 1. の（7）（以下（1）として再掲）で問題となっていた「pick と up（さらには on）との結合体でなぜ 'to (cause to) start again' という意が発生するのか」という疑問が、pick up の多義性のメカニズムも交えながら、明らかとなる。

（1）I want to *pick up on* what you said earlier.

ここでの *pick up on* は 'to return to a point that has already been mentioned or discussed' (*OALD* (s.v. *pick up on* sth)) という事象に言及する表現である。ここでは「(これからの話題を) 既に話題に上った事柄に接触させる」という「連続」概念¹¹が *on* として現れている。(1) では、抽象的事象が示されているが、具象から抽象へのメタフォリカルな意味変化の方向性に基づけば、*pick up* の概念転移の基盤は本来、以下(2)に示されるような「(物理的物体を) 拾い上げる」という物理的事象であると考えられる¹²。

$$(2) \text{ I } \left\{ \begin{array}{l} \textit{picked up} \text{ the coin} \\ \textit{picked} \text{ the coin } \textit{up} \end{array} \right\} \text{ from } \left\{ \begin{array}{l} \text{the ground} \\ \text{the floor} \end{array} \right\} \text{ then.}$$

とするならば、次の(3) - (4)に見られる *pick up* の指示事象の背景にも、この「拾い上げる」概念が依然として生きているに違いない。

(3) Soon the same waiter came back to *pick up* the dishes.

— 『英熟語ターゲット 1000』(イタリック筆者)

(4) I'll *pick you up* at five.

— *OALD* (s.v. *pick up* 1) (イタリック筆者)

これら二者のうち、後者(4)の *pick up* は、*OED* では以下(5)のように説明されている。

(5) To take (a person or thing overtaken or fallen in with) along with one, into one's company, or into a vessel or vehicle; also said of a vehicle, a ship, etc.

— *OED*, Vol. VII. (s.v. *pick up*)

また、pick up の意味に関する史的变化の実例として下記（6a-g）を同書から引用する。

- (6) a. 1698 …Mr. Constable, shall you and I go pick up a whore together?
- b. 1716 …Whoever has pickt her [a lost bitch] up, …Shall receive 10s. Reward.
- c. 1820 …Lord Yarmouth…came over to pick me up on our way to town.
- d. 1834 …Picked up in their boats by a vessel homeward bound.
- e. 1839 …One of the many omnibusses which drive round to pick up
- f. 1840 …He was picked up by a gentleman…in a wherry, holding, on to the wool of a sheep which was swimming.
- g. 1891 …To walk to the first station onward, and let the train pick him up there… (Train) stops to pick up passengers for London.

— *OED*, Vol. VII. (s.v. pick up) (一部省略筆者)

以上の理由から、「その歴史的な関係は不明 (ulterior history and relations…obscurity)」と記載されているものの *OED* における pick の *v*¹ の項に記されている ModE pick と ModE pike との史的意味のつながりと綴字の史的関係も鑑みると、pick up の意味変化は次の (7) のメタ・プロセスとして捉えられ得る。

- (7) (先の尖った物で) 刺す→[「持ち上げる」という状況の特定化]→刺したものを持ち上げる→(つめ、指で) つまんで持ち上げる→[複数ものの中から]或るものを持ち上げる→或るものを選びとる→[移動している人や物が]或るものを拾い上げる

[注：[] 内は discourse における状況]

つまり、「(先の尖った物で) 刺す」という原義から（「持ち上げる目的で」という状況下で）「(つめ、指で) つまんで持ち上げる」という派生義に至るまで「道具」に焦点が当てられている一方、その後の意味変化の過程では「対象物」が焦点化される注意志向の相違が「[複数のものの中から] 或るものを持ち上げる→選びとる」という「部分－全体」の図地分化 (figure / ground segregation) の認識を生じさせ、さらには [] 内に見られる discourse が制約条件となって「拾い上げる」概念を生み出したと考えられる。事実、次の (8) に示される pick の多義性は、「(先の尖った物で) 刺す」という原義より派生した「(つめ、指等の道具によって) つまんで分離する」という単一の概念で捉えられる。

- (8) 1. to choose: *I don't know which of the 3 dresses to choose — I like them all*
2. to pull or break off (part of a plant) by the stem from a tree or plant; gather: *He picked her a rose. / They've gone (fruit) picking today*
3. to take up or remove, usu. with the fingers or a pointed instrument, esp. separately or bit by bit: *The little birds were picking the grain. / picking the meat from a bone*
4. to remove unwanted pieces from, esp. with a finger or a pointed instrument: *Don't pick your nose!*

5. to make with or as with a pointed instrument (usu. in the phr. **pick a hole / holes in**)

— LDCE (s.v. pick¹ v.1-5)

このように、史的事実から得られた前出（7）の意味変化の流れに基づけば、本節2. 1. の（5）（以下（9）として再掲）で見られた pick up の意味分類の記載内容も同様の範疇内で捉えることが可能となる。

- (9) 1. to take hold of and lift up
2. to gather together; collect: *picked up all the pieces / (fig.) After our political defeat, we must pick up the pieces and start again*
3. to improve: *Trade is picking up again*
4. to improve in health
5. to gain; get: *where did you pick up that book / your excellent English / the habit / such ideas?*
6. to cause to increase: *to pick up speed*
7. to (cause to) start again: *pick up where we left off / to pick up the conversation after an interruption*
8. to collect (something) ; arrange to go and get (someone) : *Pick me up at the hotel*
9. to give (someone) a ride in a vehicle

— LDCE (s.v. pick up v. adv. 1-9)

つまり、上記（9）における意味分類の記載内容は各々、次の（9'a-g）の概念で捉えられ、その全てが「拾い上げる」という単一の認識に収束すると考えられる。

- (9') a. 1: 「拾い上げる→持ち上げる」概念。
b. 2: 「拾い上げることによって一箇所に収める→收拾する」概念¹³。
c. 3 = 4: 3は「対格名詞*itself*が省略された形(例 *Trade is picking [itself] up again.*)として捉えられ、「下がる物事を引き上げる」概念。4は限定的状況の相異によるだけであって、3と同様の概念。
d. 5 = 1+3+4+6: 「拾い上げる／引き上げる」ことによって「取得する」概念。
e. 6: 他動詞としての統語上の違いはあるものの、3-4と同様の「拾い上げる→引き上げる」概念。
f. 7: 限定的状況の中で1が用いられる場合。
g. 8 = 9: 主語の指示物が状況的に「移動」を要求されることは両者同じ。但し、*collect*した後に乗り物という容器に入れる概念化が9。

このように、*pick up*の多義性はそれが用いられる *discourse* の制約条件に多分に依存しているものの、そのプロトタイプ的意味は依然として「拾い上げる」概念であることに何ら変わりはない。事実、以下(10a-d)に見られる *pick up* の種々の意も、いずれもが「拾い上げる」という単一の概念に収束する事例である。

- (10) a. 対象物を拾い上げた結果、*discourse* の制約条件により、それをその場から持ち去ることが意図される場合(下例ではその移動概念が結果として *take* で明示されている)。

例: [強盗に殴り倒され、有り金全部を奪われた状況後の場面]

Nick: ...I saw you *pick up* my wallet.

Rica: Yes, I did. I did it...

Nick: Give me my money, or I'll kill you.

Rica: It's true. I *took* the money.

— 映画 *Thieves' Highway* ([] 内表記・一部省略筆者)

- b. 「拾い上げる」概念が「人」にも拡張され、その後、discourse の制約条件により、pick 一語で pick up の概念が解釈される場合：

例：[フィアンセの Polly が遠方から Nick を迎えに Rica の部屋に来る。Nick は絶望のあまりベッドでまどろんでいる場面]

Polly: Nick, Nick

Nick: Hello, baby.

Polly: Hello, Nick. [と Nick が Kiss をかわす]

Rica: You want to be alone. Help yourself. I'll take a shower.

[Rica は別室に入る]

Polly: Where did you *pick* her up?

Nick: SHE *picked* me.

— 映画 *Thieves' Highway* ([] 内表記筆者)

- c. 「拾い上げる」概念が discourse の制約条件により select のそれと等価に見なし得る場合：

例：[注文された品物を馬車で運搬してきた Lockhart が女店主 Waggoman と会話をかわす場面]

Lockhart: You're the only one in town I know to talk to. Maybe you can help me.

Waggoman: How can I help you?

Lockhart: I just hate to make that trip back with three empty wagons. I thought maybe

you could tell me where I could *pick up* a load of freight.

Waggoman: There're some salt lagoons nearby.

⋮

Lockhart: Is the salt free for taking?

Waggoman: It always has been.

— 映画 *The Man from Laramie* ([] 内表記・一部省略筆者)

例：[留置所から脱走した4人組を追跡する posse のリーダーで牧場主の Jim Douglas (ジム・ダグラス) が保安官補 Primo (プリモ) に言う場面]

Jim: Primo, you take your men and head for the border. I'm going by my place to *pick up* a fresh horse. I'll meet you at the river.

— 映画 *The Bravados* の一場面から ([] 内表記筆者)

d. 「拾い上げる」概念が discourse の制約条件により collect のそれと等価に見なし得る場合：

例：[Lockhart を尾行する男が Lockhart に気づかれて言い訳をする場面]

I'm just trying to make an honest dollar, see, not holding down a steady job and I got lots of time to *pick up* bits of news here and there, you know?

— 映画 *The Man from Laramie* ([] 内表記筆者)

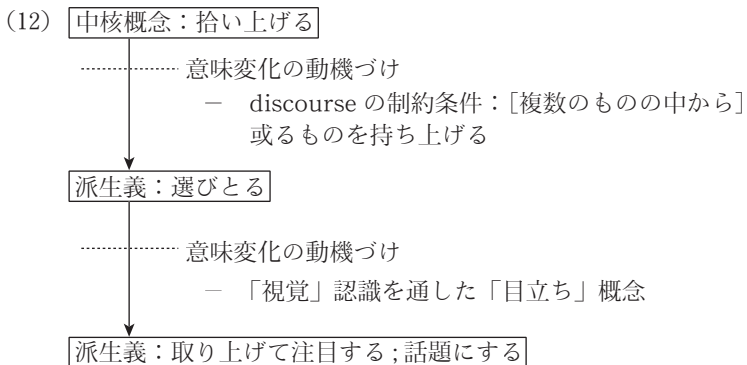
したがって、前出(3) - (4)における pick up には各々、(9a-b) / (9g) の概念が反映されており、その背後には前出(7)で明示した意味変化が依然として存在していることが確認される。その結果、前出(1) (以

下 (11) として再掲) にも「拾い上げる」概念が生きており、「[複数のものの中から] 或るものを持ち上げる→選びとる」事象が pick up によって表されていることが見出される。

(11) I want to *pick up* on what you said earlier.

— GEJD (s.v. pick up 4)

そして、ここでの「拾い上げる」概念とは「或る全体から、その一部を「上(方)」に分離させる」という [+ distinct] の概念にも相通ずる。ここに、2. 1. で観察した視覚認識を通して、拾い上げられたものが視覚空間内により際立って生じる「目立ち」概念が生ずることになる。このような視覚認識を通して得られた「目立ち」概念と pick up の運動スキーマとの認識上の結びつきは次の (12) のメタ・プロセスに集約される。



2.4. 「目立ち」概念に基づくさらなるカテゴリー化

2.3. では、「上（方）」という空間方向性から「目立ち」概念が生ずる認知メカニズムを観察した。我々の日常視覚経験に基づいた図地分化認識による「目立ち」概念と「上一下」の空間方向性との結びつきは何も *pick* と *up* との連語結合に限るわけではない。このようなメカニズムは以下（1）にも当てはまる。

(1) *Above all*, Bill was worried about gaining weight.

(1) のイタリック部分は *above all things else* の *things else* が省略された形であり、*above all things* や *above all else* と書き換えられることもあるが、いずれにしても *above*¹⁴ が用いられている限り、「上一下」の空間方向性によって何らかの「対比」が行なわれていることに変わりはない。つまり、ここでは、*all (things)* が指示する全体物から、その一部である ‘*gaining weight*’ の指示物が「上（方）」に分離して位置する認識で捉えられることによって、それが他の物事よりも「目立つ」ことになる。

なお、2.3. (12) で見出された「目立ち」概念は、「一点への突き刺し」概念表示語 *point* (cf. 寺澤 (編) (1999) (s.v. *point*)) を用いた次の (2) の連語表現にも反映されている。

(2) The conference merely *pointed up* divisions in the party.

— *OALD* (s.v. *point sth up*) (イタリック筆者)

おわりに

以上、人間の視覚器官を通して得られる種々の「目立ち」概念に光を当て、そこから導き出された図地分化モデルも活用しながら、単一語 *pick* における多義の結びつき及び連語表現 *pick up*, *above all*, *point up* における

各語の有機的な意味的整合性をメタ・プロセスの観点から明らかにした。このように、人間の自然な認知活動に沿った意味のからくりを学習者に提示するためには、未だ全容解明に至らない人間の脳内活動について、その結果事象の現れとして捉えられる「言語」という側面から、英語母語話者が如何にして外界の事物を把握し、自身が属する文化的・社会的枠組みとの相互作用で認識体系（frame）を構築しているのかを明らかにし、その認識体系を帰納的に語彙指導に活用することが不可欠ではないかと考える。換言すれば、ありのままの外界事象と記号としての言語を結びつける「認知」のメカニズムを外国語学習に応用することで、人間の進化・変化の足跡に即した「単語内の複数の意味のつながり」及び人間が本来的に所有する原始的なイメージ（primitive image）を複合させることによって得られる「連語表現の意味のからくり」を学習者に咀嚼させることが可能となる。

なお、メタ・プロセス理論の導入／活用を中心にした以上の理念に基づき、2008年度春・夏学期（於京都外国語専門学校）で語彙学習指導を展開した諸講座における学習者の満足度を調査したフォーマルなアンケートの結果を以下に付して本稿を結ぶ。

2008年7月26日

京都外国語専門学校授業評価委員会

森山先生

火曜日第3限・第4限 ボキャブラリー・ビルディング（必修科目）

2008年度春学期授業評価アンケート結果のご報告

アンケートの質問事項は以下の5項目で、各項目とも「1. いいえ 2. どちらか言えばいいえ 3. どちらとも言えない 4. どちらかと言えばはい 5. はい」の5つの選択肢の中から1つを選ぶ回答形式で行いました。

質問事項

1. 授業の開始と終了の時間は、きちんと守られていましたか。授業時間は有効に使用されてきましたか。
2. 教員の声はよく聞き取れましたか、黒板の文字はよく見えましたか。
3. 授業中の私語や授業の妨げになる行為に対し、適切な対処がされてきましたか。
4. この授業は役に立ちましたか。
5. 全体として、この授業に満足しましたか。

一覧表の数字は、回答者数を示しています。

火曜日第3限 ポキャビル

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5
5と回答した者	15	15	13	15	15
4と回答した者			2		
3と回答した者					
2と回答した者					
1と回答した者					
当該科目	5.00	5.00	4.87	5.00	5.00
英語科目平均	4.71	4.66	4.54	4.37	4.35
全校平均	4.78	4.77	4.62	4.59	4.56

火曜日第4限 ポキャビル

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5
5と回答した者	15	16	15	17	17
4と回答した者	3	2	2		
3と回答した者			1	1	1
2と回答した者					
1と回答した者					
当該科目	4.83	4.89	4.78	4.89	4.89
英語科目平均	4.71	4.66	4.54	4.37	4.35
全校平均	4.78	4.77	4.62	4.59	4.56

[謝辞] 末筆となったが、本シリーズの構成中に亡くなられた森山元嗣（2009年逝去、享年66歳）氏には常に温かく見守って頂きました。この場を借りて衷心より御礼申し上げます。

< Notes >

1. (2頁目)

本論「はじめに」の(2)は「一方向仮説」における意味変化の流れの方向性に沿った見解である (cf. 河上(編) (1996: 203) (s.v. 一方向仮説 (hypothesis of unidirectionality))). 一方向仮説に基づいた捉え方に対しては、山梨(1995)でも指摘されているように、全ての語が具体物を指示する意味から抽象物を指示する意味へと変化を起こしたわけではないとするわずかばかりの反例も認められる。しかしながら、大部分の表現における意味変化の方向性は一方向仮説の流れに沿っていることから、英語語彙の学習指導を行なう上で概念的な体系化を図るために本稿も同様の捉え方に基づいて論を進める。

2. (3頁目)

中核義が原義と直結する語は多いが、中にはそうでない語も存在する。OE期の「対抗」概念を原義とする with は ModE では「同伴」概念をその中核とする。「対

抗」概念表示語 *against* も交えながら、通時的な観点から両者が結びつくプロセスについて詳しくは森山（2008a: 121–131）参照。

3. （3頁目）

国際社会で活躍できる人材を育成するために言語教育の重要性が問われて久しい今日、教壇に立ってタクトを揮う人たちに、自身の指導内容をこれまで以上に深く理解することが求められているのは言うまでもない。中村（2004）でも、高等教育の充実に向けてのFD課題を解消する方策の一つとして、「自らの専門を極める事」「オリジナル教材を授業に生かすための日常からの研鑽」「学会の研究及び企業の共同研究での活動」「卒業生からの信頼及びそれに応える支援」という、未来を担う教師像の力量が問われている。特に前二者、すなわち「自らの専門を極める事」「オリジナル教材を授業に生かすための日常からの研鑽」というFD課題に対して、教壇に立ってタクトを揮う人たち自身の背景知識におけるさらなる向上がその解消策の一つになるのではないかと考え、論を進める。

4. （7頁目）

本稿では、従来の単語解説の一例を提示するために、（筆者が知る限り）学習者によく使われている単語帳の記載を引用したが、他の単語帳・熟語帳と呼ばれる既存の学習書においても日本語訳を列挙することに終始した記載内容となっている場合が多い。また、専門書・研究書と一般英語学習者向け学習書との区別を行なうために、後者は著者名ではなく著書名で記載することにする。以下同様。

5. （7頁目）

本節（2）の引用物と同じ出版社が発刊している『英単語ターゲット1900』には、単一語 *pick* の掲載項は確認されなかった。

6. （10頁目）

このような「立つ」という「上方」への姿勢変化と「目立つ」との概念的結びつき、すなわち「観察者の目（＝視界）に或る対象物が立つ→（上方に拡大する）→出現する」という概念遷移は他の英語表現にも観察される。

（1）What's *up*?

(2) The cracks in the wall *show up* in the sunlight.

— *LDCCE* (s.v. *show v.*)

なお、演技上の観点から観察者の視界内における対象者の「拡大」概念が「目立つ」事象に通じる表現が下記(3)に観察される。

(3) The actors were really *hamming* it up to amuse the audience.

7. (16 頁目)

同様の概念化は「…に追いつく」の意を表示する *catch up with*, 「…を縛り上げる」の意を表示する *tie up*, 等の連語表現の *up* にも当てはまる。

8. (16 頁目)

以上, 詳しくは森山 (2008a: 306–356) 参照。

9. (17 頁目)

ここでは便宜上「上方への移動 (及び上方移動到達後の位置)」として記載したが, 因果関係を考えると, 厳密には, 当然「上方への移動」が *up* の中核概念と設定される。詳しくは森山 (2008a: 305–403) 参照。

10. (17 頁目)

「開放」概念の *up* について詳しくは森山 (2008a: 306–356) 参照。

11. (18 頁目)

詳しくは森山 (2008a: 357–376) 参照。

12. (18 頁目)

以下 (1) に示されるように、「多くのものの中から取り出して見分ける」という意では日本語の「ピックアップ」に相当しない。

(1) <人・物> を [多くの中から] 見分ける、識別する、見出す (*spot*)、ピックアップする [from]

【◆この意味で *pick up* は不可】

I can never *pick him out* among a crowd. 人込みの中からも彼を見つけ出せない

— *GEJD* (s.v. *pick out 2*) (下線筆者)

13. (22 頁目)

本節(9'b)(以下(1)として再掲)に見られる「拾い上げる」事象と「一箇所に収める／集合させる」事象との概念的結びつきは、次の(2)に示されるように、漢語「拾」から得られる概念とも並行する。

(1)「拾い上げることによって一箇所に収める→收拾する」概念。

(2) ①ひろ・う(ひろふ)。ひろいとる。「拾得」 ②おさめる(収)。あつめる。

「收拾」

③ゆごて。弓を射るとき左臂(ひだりひじ)につけるもの。 ④とお(と

を)。=十。→十の 以下

解字 会意。扌(手) + 合。手でものを合わせるの意味から、ひろいあつめるの意味を表す。

—『新漢語林』(s.v. 拾)(下線筆者)

なお、下記(3)に示されるように、「拾」は「十」の代りに用いられることもあるが、そこには「十本ひとまとめに集めた数」という「集合」概念が依然として生きている。

(3) 金銭の記載などには、文字の改変を防ぐため、什(ジュウ)・拾の字を用いることがある。

—『新漢語林』(s.v. 十)(下線筆者)

14. (26 頁目)

「上(方)」の空間方向性の範疇に属する above, over 各々の概念については森山(2008a: 253-271) 参照。

< Bibliography >

Burchfield, R. W. (ed.) (1978). *The Oxford English Dictionary* (= OED). Clarendon Press. Oxford.

Hornby, A. S. (ed.) (1995). *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (= OALD). Oxford University Press. London.

- Lakoff, G. and M. Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999). *Philosophy in the Flesh — The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought —*. Basic Books. New York.
- Leech, G. N. ed. (1989). *An A—Z of English Grammar & Usage (= AEGU)*. Thomas Nelson and Sons. New York.
- Procter, P. (ed.) (1978) *Longman Dictionary of Contemporary English (= LDCE)*. Longman. London.
- Ungerer, F. and H. J. Schmid (1996). *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman. London.
- 荒木一雄他（編）（1985）『英語表現辞典』（= *WGEU*）研究社。東京。
- 市川繁治郎他（編）（1995）『新編 英和活用大事典』（= *KDEC*）研究社。東京。
- 上野義和（1995）『英語の仕組み 一意味論的研究一』英潮社。東京。
- 上野義和（2007）『英語教育における論理と実践 一認知言語学の導入とその有用性一』英宝社。東京。
- 上野義和・森山智浩（2003）『イメージ&カテゴリーの英単語』KK ウィン。大阪。
- 上野義和・森山智浩他（2002）『認知意味論の諸相 一身体性と空間の認識一』松柏社。東京。
- 上野義和・森山智浩他（2006）『英語教師のための効果的語彙指導法 一認知言語学的アプローチ一』英宝社。東京。
- 鎌田正・米山寅太郎（編）（2004）『新漢語林』大修館。東京。
- 河上誓作（編）（1996）『認知言語学の基礎』研究社。東京。
- 教育開発出版（2001）『[進級式] 中学英単語』教育開発出版。東京。
- 小西友七他 編（2001）『ジーニアス英和辞典』（= *GEJD*）大修館。東京。
- 霜康司・刀根雅彦（2004）『システム英熟語』駿台文庫。東京。
- 下村博文（2003）『学校を変える！「教育特区」』大村。東京。
- 竹内理 編（2000）『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社。東京。

- 田中茂範他（2007）『NHK 新感覚☆キーワード英会話 イメージでわかる単語帳』日本放送協会，東京。
- 寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』研究社，東京。
- 中村明德（2004）「高等教育の充実に向けて 一いかに魅力ある授業を創り出すかー」『南大阪大学紀要』第6巻（通号23号）太成学院大学。
- 花本金吾（1997）『英熟語ターゲット1000』旺文社，東京。
- 宮川幸久（1996）『英単語ターゲット1900 大学入試出る順』旺文社，東京。
- 森山オアナ（2009）「パーソナル・スペースを導入する効果的語彙指導法の研究 ー 視覚認識を通じた心理と言語のクロス・オーバー ー」『FD改革下における語学教員への7人の新提案』星雲社。
- 森山智浩（2008a）『英語における語彙概念の応用研究 ー空間関係づけ範疇に関する単一語・連語表現を中心にー』博士論文，京都外国語大学。
- 森山智浩（2008b）「英語動詞 *take* に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育 ー認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通してー」『近畿大学英語研究会紀要』第2号 近畿大学英語研究会。
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房，東京。